
遊戯王GX 闇の侵略者

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 闇の侵略者

【Nコード】

N0314Z

【作者名】

凧

【あらすじ】

三幻魔を巡るセブンスターズと影丸理事長との戦いが終わり、二年生になった十代達はエド・フェニックスとのデュエルに勝利。翌日、クロノス先生がデュエルすると聞きデュエル場に向かうと。。。

(前書き)

初の短編！PVやユニーク数、連載化希望が多ければ連載するかも
しません。

セブンスターズとの戦いが終わり、新たな新入生たちがデュエルアカデミア本校に入学たその日、レッド寮の部屋で寝ている生徒がいた。

??? side

ドンドンドン!!

「ん……」

誰かが部屋のドアを叩いている音が聞こえる。俺は頭の上の時計を手に取り時間を見つめる。

「……12時か。もう昼なのに、誰だ？」

のんびりとベットから降り、いまだ叩かれているドアに向かう。

「はいよ〜どな……た？」

そこに立っていたのは蒼色の長い髪を靡かせる「ここにいないとは思えない見知った顔。

「久しぶりにい」

ボタン ガチャ

俺は無言でドアを閉め、鍵をかけると再びベットに潜り込む。

「さて、もうひと寝入り」

ガチャ

「いきなり閉めだすなんて酷いじゃない。義兄さん」

そうやって声をかける義妹の坂口さかぐち海歌。あいつが指に引っ掛け

てるのはこの部屋の複製キー。……こんなときレッド量の設備を

恨む。

あきらめてベッドから出て海歌を見る。

「で？なんでお前がここにいる？」

「入学したからよ。それと、早速だけどデュエルしてもらおうわ」

「は？」

海歌の右手が動き、何かを当てたと思ったら、俺は意識を失った。

十代 side

エドとのデュエルが終わった次の日、校内を歩いていた俺と翔の前から二人のオベリスクブルーの生徒が走って来た。

「おい！デュエル場でクロノス先生がデュエルするらしいぞ！」

「ほんとか！？相手は？」

そんな話をしながら俺と翔の横を二人のオベリスクブルーの生徒が駆け抜けていく。

「クロノス先生がデュエルだって！？おもしろそうだ！行こうぜ翔！」

「あ！待ってよアニキ〜！」

デュエル場に着くと大勢の生徒がいたけど、見知った顔の隣が空いていた。

「三沢ー！」

「十代！お前もクロノス先生のデュエルを見に来たのか？」

「ああ！」

フィールドにはクロノス先生が立っているけど相手が見当たらない。

「相手は誰なんすか？」

「いや、残念ながら俺は知らない。だが、聞いた話によると新入生が関係あるらしい」

「お？誰か来たぜ？」

フィールドに来たのはブルーの制服を着た女子。けど、誰だあれ？

「あの子は坂口 海歌!？」

「三沢、知ってるのか？」

「ああ。坂口 海歌、数多くの大会に優勝しているデュエリス
トで、すでにプロからも誘いがある子だ」

「へえ」

そんなすげえ奴なのか!どんなデュエルをするのか楽しみだぜ!

「えゝみなさゝん。このたび、エド・フェニックスと同時に、シ
ニョール海歌が我がデュエルアカデミアに入学したノゝネ。しか
しプロからの誘いもある彼女は、このアカデミアの実力がどれほ
どのものか知りたいそうなノゝネ。あまりにも酷いゝと、彼女はす
ぐに辞めてしまうノゝネ!よって、実技最高責任者である私が彼女
と「待つてください」い、一体なんなノゝネ?」

「教師であるあなたの実力もですが、生徒の実力も知りたいたいで
す。ですから私が連れてきた生徒とデュエルして実力を見せてくだ
さい」

「な、何ですゝと!?(マズイノゝネ!もしシニョール海歌が連
れてきた生徒ゝが、オシリスレッドだったら、彼女が辞めてしまう
ノゝネ!!)」

言い終わるとあいつは一旦ここから姿を消した。それと同時にク
ロノス先生がオロオロしだした。

「クロノス先生、焦ってるな」

「もし彼女が連れてきたのがオシリスレッドだったらどうしよ
う」とても思ってるんだろう」

「あ!戻ってきた・・・す?」

戻ってきたあいつはオシリスレッドらしいき生徒を連れてきた。
そいつは気絶しているみたいで、引きずって連れてこられていた。

「なんだ。オシリスレッドか」

「終わりだな」

周りの生徒がそんなことを言っているなか、翔はあいつが誰か知ってるらしい。

「あ！あの子坂口さかくち 泉君っす！」

「翔、知り合いか？」

「知り合いか？つてアニキ、僕たちと同学年で隣の一人部屋に住んでる子っすよ」

「へ？そうなの？」

「最低限の授業にしか出ない生徒ってことでレッド寮じゃ有名っすよ？」

泉 side

「ほら義兄さん、起きてください」

「うぐ！？」

突如衝撃が走り、意識が浮上した。目の前には海歌。デュエル場なのは分かるが一体何が？

「ほら、デュエルディスクを起動させて」

「は？」

「早く」

「お、おう」

「それじゃあお願いします」

訳の分からないまま何時の間にか腕に付いていたデュエルディスクを起動させると、海歌が退き、目の前にはデュエルディスクを起動させたクロノス先生。

「それではデュエルなノ〜ネ！」

「は？」

泉 LP4000

クロノス LP4000

「私のターン！ドロー！」

クロノス 手札：6

「(まさかオシリスレッドの生徒が相手なんくて……。こうなったら私の實力を見せて我が校に留まってもらおうネ!) 私は、ギア・タウン『フィールド魔法』を発動!そして、『アンティーク・ギアビースト古代の機械獣』を攻撃表示で召喚!」

ギア・タウン 歯車町 フィールド魔法

「アンティーク・ギア」と名のついたモンスターを召喚する場合には必要なりリースを1体少なくする事ができる。

このカードが破壊され墓地に送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から

「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

古代の機械獣 アンティーク・ギアビースト

星6 / 地属性 / 機械族 / ATK2000 / DEF2000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが戦闘によって破壊した相手効果モンスターの効果は無効化される。

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

「カードを一枚伏せ、ターンエンドなノ〜ネ」

クロノス

場：アンティーク・ギアビースト古代の機械獣 / ATK2000

魔・罠：伏せ1 ギア・タウンフィールド：歯車町

手札：3

え〜……。なんか初っ端から酷い状況なんだけど……。適当

にやっつてさっさと終わらせてもらおう。

「俺のターン、ドロー」

手札：6

「モンスターをセットしてエンド」

泉

場：伏せ1

手札：5

「おい！そのオシリスレッド！やる気あるのか！」

「つまんねえデュエルすんじゃねえ！」

外野が何か言ってるが気にしない。

「私のターン！ドロー！」

手札：4

「私は、『アンティーク・ギアビースト古代の機械獣』をリリースし、『アンティーク・ギアゴレム古代の機械巨人』を召喚！」

アンティーク・ギアゴレム
古代の機械巨人

星8 / 地属性 / 機械族 / ATK 3000 / DEF 3000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫カードを発動できない。

「さらに！手札から速攻魔法『アンティーク・ギアビーストサイクロン』を発動！『ギア・タウン歯車町』を破壊し、墓地から『アンティーク・ギアビースト古代の機械獣』を特殊召喚するノ〜ネ！」

「出たー！クロノス先生のエースモンスター！」

「オシリスレッドをぶつ潰せー！」

あー、うるさ、

「バトル！『古代の機械巨人』^{アンティーク・ギアゴレム}で、守備モンスターを攻撃！『アルティメット・パウンド』！！！」

俺の伏せモンスター『ヘルウェイ・パトロール』は『古代の機械巨人』^{アンティーク・ギアゴレム}の攻撃で砕け散った。

ヘルウェイ・パトロール

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK1600 / DEF1200

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル×100ポイントダメージを相手ライフに与える。

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。

「『古代の機械巨人』^{アンティーク・ギアゴレム}が守備モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを与えるノ〜ネ！さらに、古代の機械獣で、ダイレクトアタック！『プレシヤス・フアング』！」

「ぐう・・・！」

泉 LP4000 - (3000 - 1200) - 2000 = 2000

「私はこれで、ターンエンドナノ〜ネ」

クロノス

場：古代の機械獣 / ATK2000 古代の機械巨人 / ATK3000

魔・畏：伏せ1

手札：2

「んじゃ俺のターン、ドロー」

手札：6

「俺はこのま「あつ！義兄さん言い忘れたことがありました」・・・何？」

「もし負けたらこれを役所に提出します」

デュエル場が上がってきた海歌が一枚の紙を渡し、再び降りる。

え〜つと何々？『私、坂口 泉は健やかな時も病める時も坂口

海歌を愛し、妻とすることをここに誓います。 坂口 泉』・・・

「何コレ？」

「見ての通りただの婚姻届です」

「待て、色々待て。名前のところはパソコンで打ち込んだんだろ
うけどさ、俺の名前のところに俺の指紋らしきものが押されてるん
だが？」

「さつき気絶してる時にポンツと押ししました」

「・・・俺まだ結婚できる年齢じゃないからな？」

「安心してください。それまでちゃんと弁護士の人に保管しても
らいますから」

「・・・こいつ、マジだ。」

「あの・・・私はいつまで待たされればいいノ〜ネ？」

「・・・すいません」

負ける訳には・・・いかねえ！

「俺のフィールドにモンスターがいない時、手札から『インヴェ
ルズの魔細胞』を特殊召喚する！」

インヴェルズの魔細胞

星1/闇属性/悪魔族/ATK0/DEF0

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手
札から特殊召喚する事ができる。

このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスターのアドバン

ス召喚以外のためにはリリースできず、シンクロ素材とする事もできない。

「さらに、墓地の『ヘルウェイ・パトロール』の効果発動！このカードを除外することで、手札の攻撃力2000以下の悪魔族を特殊召喚する！『インヴェルズの門番』を特殊召喚！」

インヴェルズの門番

星4 / 闇属性 / 悪魔族 ATK1500 / DEF1900

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、「インヴェルズ」と名のついたモンスターが表側表示でアドバンス召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて1度だけモンスターを通常召喚する事ができる。

「俺は『インヴェルズの魔細胞』をリリースし、レベル7の『インヴェルズ・ギラファ』を召喚！」

「ナンデスート！レベル7を一体のリリースで召喚でスート！？」

インヴェルズ・ギラファ

星7 / 闇属性 / 悪魔族 ATK2600 / DEF 0

このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスター1体をリリースして表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。

「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して墓地へ送り、自分は1000ライフポイント回復する事ができる。

「このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスター1体をリリースして表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる！さらに、「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこの

カードのアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して墓地へ送りライフを1000ポイント回復する！伏せカードを墓地へ！」

「又、又ウ」

クロノス

伏せカード（聖なるバリア ミラーフォース） 墓地

泉 LP2000+1000=1200

「し、シカシ、私の場には攻撃力3000の『古代の機械巨人』アンティーク・ギアゴレムが次の私のターンであたのそのモンスターを破壊するノ〜ネ！」

「次のターンは来ない！」

「ナヌ!？」

「『インヴェルズの門番』の効果発動！このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、『インヴェルズ』と名のついたモンスターが表側表示でアドバンス召喚に成功したターン、もう一度召喚を行うことが出来る！」

「に、二度目の召喚!？」

「俺は『インヴェルズの門番』をリリースし、『インヴェルズ・モース』を召喚！」

インヴェルズ・モース

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK2400 / DEF0

「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、1000ライフポイントを払う事で、相手フィールド上に存在するカードを2枚まで選択して持ち主の手札に戻す。

「（ホッ）攻撃力2400では、私の『古代の機械巨人』アンティーク・ギアゴレムは倒せ

ないノ〜ネ」

「倒す必要なんかありませんよ」

「ど、どうということナノ〜ネ？」

「こういうことです！『インヴェルズ・モース』の効果発動！

「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカー

ドのアドバンス召喚に成功した時、1000ライフポイントを払う

事で、相手フィールド上に存在するカードを2枚まで持ち主の手札

に戻す！二体の『古代の機械』アンティーク・ギアを手札に戻す！」

「マ、マンマミーヤ！私の『古代の機械巨人』アンティーク・ギアゴレム・・・！」

「これで身を守るモンスターはすべていなくなつた！『インヴェ

ルズ・モース』と『インヴェルズ・ギラファ』でダイレクトアタッ

ク！」

「マンマミーヤ〜〜〜〜！！！！！」

クロノス LP4000 - 2400 - 2600 - 1000

「うし！勝つた！海歌、約束は守ってもらうぞ！」

「分かつた。・・・これは弁護士に預けておくわ」

「ちよ〜つと待て！」

「・・・何？」

クロノス先生のところに行こうとする海歌の肩を掴んでこっちを
向かせるときよんとんとしていた。

「それを渡せ！」

「何言ってるの？私は『負ければこれを役所に提出する』とは言
つたけど義兄さんに渡すとは言っていないし弁護士に預けないと言
ってないわ」

「そ、そりゃそうだが・・・」

「じゃ、この話はおしまい」

い、言いくるめられてしまった・・・。

俺が沈んでいるなか、海歌はクロノス先生に近づく。

「クロノス先生」

「ドキイ！な、何でス〜ノ・・・？」

クロノス先生は恐る恐る顔を向け海歌の言葉を待った。そんなクロノス先生に海歌は笑顔でこう言った。

「素晴らしいです！」

「・・・へ？」

「このアカデミアで最も成績の悪いオシリスレッドが教師に勝てるぐらい強いなんて・・・決めました！私、このままアカデミアに通います」

クロノス先生が目をパチクリさせているが、海歌は構わず言葉を続ける。

「クロノス先生、これからよろしくお願いします！」

「も、勿論な〜ネ！」

俺は知らなかった。海歌がここに来たことが、このデュエルが、俺の波乱の学園生活の序章だったことに・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0314z/>

遊戯王GX 闇の侵略者

2011年12月1日04時52分発行